

# 養育スタイルに関する比較文化研究

佐藤 公代

(教育心理学教室)

(平成16年6月7日受理)

## Cross-cultural Research on Parenting Styles

Kimiyo SATOU

### (問題と目的)

佐藤(2001)は、「親子関係に関する研究(1)―相互の理解と相互の思いやりを中心として―」と「親の養育態度と子どもの性格形成に関する研究」において、今後の研究として、養育スタイルの比較文化研究を提唱した。今回は、デイヴィット・マツモトの「文化と心理学」の観点から、養育スタイルに関する比較文化を整理し、まとめていく研究スタイルをとることにした。

### (方法)

「文化と心理学」(デイヴィット・マツモト著、南雅彦、佐藤公代監訳、北大路書房)の90-93頁を整理し、まとめる。

### (結果と考察)

親は、子どもの発達のプロセスで重要な役割を演じていることは、自明の理である。

バウムリンドは、「権威主義的な親」(有無を言わずに服従を求め、子どもを支配する)、「甘い親」(子どもに自分自身で生活を統制させ、確固とした指針をほんのわずかしき与えない)、「毅然とした親」(厳しいが、公平で、理想的である。協力的で、社会的に余裕があり、精神的にも健全で、有能で、自立的な子を育むように見受けられる)の3種類のパターンを発見し、マッコビーとマーティンは、「放任的な親」(自分自身の生活に没頭し

すぎて、子どもに適切に応じないし、関心がない)の4番目の親のスタイルを定義づけている。これらの考え方は、日本でも言い方は違っていても、4種類のパターンとして、常識的に認知されている。

米国、日本、ヨーロッパ、インドとの比較文化について、紹介し考察していく。

(1) 米国と日本との比較(コンロイ、ヘス、アズマ、カシワギの研究)

「自文化」化と社会化パターンの広い文化的相違を反映し、日本においては、個人と個人の対人関係の絆、米国では、報酬と罰の直接的手段に訴えている。つまり、アメリカ人の母親は、親の権威を強調するのに対し、日本の母親は、感情に訴え、柔軟性が高い。母親の管理の方法に、「権威、規則、感情、結果、モデリング」の категорияが分類されている。日常の相互作用で母親が遭遇し、大人の仲裁が必要な架空の状況6場面について、アメリカ人と日本人の母親と第一子が、面接法で回答したものである。

(2) ヨーロッパ系アメリカ人と中国系アメリカ人の母親との比較(ケリーとツエンの研究)

ヨーロッパ系アメリカ人の母親は、「繊細さ、一貫性、非制限、しつけ、規則の設定」が、他方、中国系アメリカ人の母親は、「体罰、怒鳴ること」が多い。その点、後者の母親の方が、本来の文化へのつながりを維持する必要があると結論づけられている。

(3) ドイツ人とアメリカ人との比較(デヴェレクス、ブロンフェンブレナー、スシの研究)

ドイツ人はアメリカ人よりも愛情、交際、直接的な

罰、規則に関しては、親としてのふるまいに熱心である。

(4) 寝室をどのようにするかの研究 (モレリ, オッペンハイム, ログフ, ゴールドスミスの研究)

一人で寝ることが自立心を育むのに役立つという想定に基づき、アメリカ人はいっしょに寝ることを避け、特別な毛布やおもちゃを与えて、一人で寝るのは怖くないことを子どもに諭している。それに対し、他の国の文化圏では、この価値観をもっていない。ヨーロッパの田舎では、幼児は生まれて最初の年のほとんどを母親といっしょに寝る。マヤ族の母親は、子どもと深い絆を結ぶ必要性を認識しているので、数年間、子どもにいっしょに寝ることを認めている。赤ちゃんが生まれると、年長の子どもは同じ部屋にある別のベッドに移るか、他の家族メンバーとベッドをともにする。日本の家庭では、赤ちゃんは、父親がいる所か、離れた部屋で母親といっしょに寝る。

(5) 親子の相互影響の調査 (ベスト, ハウス, バーナード, スピッカー, デヴェレクス, ブロンフェンブレナー, スシ, ブロンスタインの研究)

フランスとイタリアの父親は、母親より没頭して子どもと遊ぶが、ドイツではその反対である。アメリカの家庭では、男女の役割区分が確固としているので、ドイツの家庭と比較すると、母親の相互影響がドイツより著しく目立っている。メキシコ人の父親は、母親よりも子どもと遊び、つきあうが、母親の養育的な面は、即時に身体的要求に応えることである。

(6) 幼児発達に関する母親としての期待度 (ジョシ, マクリーンの研究)

子どもが各45項目の発達課題を達成するのに親が望む年齢を示唆する質問を母親に対して行った結果、日本の母親は、イギリスの母親よりも教育、自己管理、周囲の環境に対する自立の分野を高く望んでいる。インドの母親は環境的自立を除き、すべての分野で日本とイギリスより低い期待度を示している。

(7) 親のスタイルに関するイメージの研究 (ルーサー, クウイランの研究)

インドと米国の親のスタイルに関するイメージは、「懸念、自己、快活さ、うつ的な傾向」に関連している。

(8) 親のスタイルの文化的類似点 (ケリー, ツェン, ソリー, キャマラー, フォックス, パップス, ウオーカー, トリンボリ&トリンボリ, ケラー, チャシオテス, ルンデの研究)

ヨーロッパ系アメリカ人と中国系アメリカ人は、3歳から5歳の時よりも6歳から8歳の時に、行儀、学校関連の技能、感情のコントロールに重点をおいている。親の行動チェックリストで100項目のランク表から、メキシコと米国の母親は、発達度の期待あるいは親としてのふるまいに相違がない。英国系アメリカ人、ギリシア人、レバノン人、ベトナム人グループの母親全員が、権力の行使をしつけの方法にいちばんよく使っている。米国、ドイツ、ギリシアの親は、子どもに対することばと声の出し方に潜在的な共通性がある。

以上、(1) - (8) にみられるように、親のスタイルと子育てにおのおのの文化の相違点と類似点を紹介した。これらは、親のスタイルは文化が示唆する発達目標と一致する傾向があることを示している。つまり、生存に必要な特定の価値観、信念、態度、行動での文化的相違は、発達目標の相違と関連している。

親のスタイルにおける文化的相違は、他の社会的要因、特に経済と大家族にも同じように反映されている。文化と経済条件の相違に関して、育児の習慣の違いは、考え方の相違だけでなく、生活水準の相違の理由がある。例えば、スラム街に住むブラジルの母親は、食物や衣服などの生活必需品を得る収入を稼ぐために、外に出て働いている間、5歳以下の子ども3人を物のない暗い部屋に一日中鍵をかけて閉じこめている。米国とアルゼンチンの第一子の母親に対して、仕事をする理由と務時間についての調査 (パスキューアル, ヘインズ, ギャルペリン, ボーンスタイン) において、両国間で、「結婚期間の長さ」と「妊娠中に働くかどうか」が、出産後に「仕事に就くかどうか」の予測になる。つまり、米国では、よい教育を受けて高い地位の職をもつ女性は、労働時間が長い、アルゼンチンでは、米国と同様の社会的地位を持つ女性は労働時間が短い。

子どものあやし方において、子どもを抱き上げ肩へもってくると、子どもは泣きじゃくるのをやめ、無視され甘やかされるのをいやがり、泣くまま放っておか

れる子どもは、もっと泣きじゃくる、ことは、一般に言われていることである。ところが、中国のへんぴな田舎の川沿いの地域では、生後間もない幼児は、母親が畑で働いている間、そのまま放っておかれる。子どもはまっすぐ体を支え、吸収性のオムツのような役目をする大きな砂の袋の中に入れられる。どんなに泣いても何の反応も返ってこないということをすぐに学習して、泣いてもすぐに泣くのをやめる。子どもの学習力の適応性には、感心させられる。

以上、養育スタイルに関する文化的類似点と相違点に関して、デイヴィット・マツモトの著書（訳）から紹介した。ここで、注意しておかなければならないことは、各国との比較において、興味深い結果がみられたとしても、それを一般化して、国どおしの比較ととらえないでいただきたい。例えば、日本の母親は、すべて感情に訴えて行動するとか、自立の分野に期待度が高いなどとまるごとみてしまわないことである。比較研究の難しさは、条件の等質さをどのように確保して、比較するべきものを比較しているのか、何が条件の決めてなのかを詳細にみていかなければならないことであろう。研究のために子どもがいるのではなく、子どものために研究があるのだということを常々考えていかなければならない。

#### （引用文献）

デイヴィット・マツモト著 南雅彦、佐藤公代監訳、  
2001 文化と心理学 北大路書房 90-93

佐藤公代 2001 親子関係に関する研究（1）－相互  
の理解と思いやりを中心として－ 愛媛大学教育学部紀  
要 第1部 教育科学 第47巻 第2号 21-24

佐藤公代 2001 親の養育態度と子どもの性格形成に  
関する研究 愛媛大学教育学部紀要 第47巻 第2号  
25-29

（注）本論文は、日本保育学会第56回大会発表論文集  
（2003）の336-337頁を転載したものである。短期留  
学時代にお世話になったデイヴィット・マツモト氏と  
南雅彦氏に感謝致します。ここに掲載させて頂きまし  
て誠に有り難うございました。